

## おがみ山物語

奄美市立朝日小学校 五年 永岡 佳純

アマミシマのどこかにある寝利屋（ねりや）と金谷（カナヤ）とよばれる集落の間に、神山という山があった。昔からここでは、集落を見下ろすような小高い山は、神様がおりに立つ山として「カミヤマ」とよばれていた。

さて、神山には、ケムケムというようかいがいた。ケムケムは、昼間は、山から下りてきて人間とすもうをとって遊び、夜は海辺で魚をとってくらすやさしいようかいだった。

いつものように夜の海で魚をとっていると、岩場のかげから苦しそうな声が聞こえた。

「助けて。だれか。助けて。」

ケムケムは、声のする方へそろりそろりと近づいた。そこには、あみにかまいった人魚がいた。

「おい、人魚なんて人間に見つかったら大変だぞ。今、おいらが助けてやる。」

ケムケムは、人魚の体をきずつけないようにやさしくあみをほどいてやった。

「人魚って海の中にいるんじゃないのけ。」

「私、人魚のザンネ。実は、もうすぐここに大津波がや

ってくる。それを伝えたくて……。そうだ、これ助けてくれたお礼。」

そういうと人魚は、自分の体から虹色にかがやくうろこを一枚とってケムケムに渡し、夜の海へもどっていった。「それにしても大変なことになったぞ。」

ケムケムが、まず向かったのは、神山の守り神でもあるハブの長老だった。

「ハブリ様。大変だよ。津波がくるんだ。」

「何じゃと。そんな話、信じられるものか。」

「本当なんだよ。人魚が教えてくれたんだ。その証にはら、これ。」

ケムケムは、人魚にもらった虹色にかがやくうろこをハブの長老に見せた。

「うむ、分かった。わしは、山の住人たちにこのことを伝えるから、お前は、ルリカケスの森にいるルリカ姫に知らせるんじや。きつと力をかしてくれるはずじや。そうじや。ほれ、これを持ってゆけ。」

そういうと、長老は自分の体から金色にかがやくうろこを一枚はいでケムケムに渡した。ケムケムは、ルリカケスの森へと急いだ。

「姫様。ルリカ姫様。」

「どうしたのケムケム。そんなにあわてて。」

「大変なんだ。もうすぐここに津波がやってくるんだ。」

ハブの長老様に相談したら、ここに行きなさいって。その証に、これを。」

「まあ、これはハブのうろこ。なかなか手に入らないといわれるハブのうろこをあなたが持っているといううことは…。」

ルリカ姫は、うろこを口ばしではさんで、しばらくじつと見つめていた。

「分かりました。私たちルリカケスをはじめ、森の鳥たちは、年老いて動けない生き物たちや小さい子どもたちを、空から飛んで運びましょう。」

それから、ケムケムは、神山の頂上を目指して、走り始めた。木から木へ飛び移り、いくつもの岩や大木を飛びこえ、走りに走った。

神山の頂上には、もうすでに森の仲間たちが少しずつ集まり始めていた。

「おお、みんな無事だったようじゃの。」

「お年寄りも子どもたちも、みんな無事に運べましたよ。これもケムケムのおかげね。」

神山の生き物たちは、少し安心したようだった。ところが、ケムケムが、海に目を向けたとき、暗い夜の海と空の間に一本の白くて細いすじが広がっていくのが見えた。

「津波だ。」

「どんどん大きくなってるぞ。」

「なんて高さだ。」

それを見た神山の生き物たちは、おびえ始めた。白くて細いすじは、みるみる大きくなり、またたく間に、大津波に変わった。

それを見たケムケムは、天に向かって手を合わせ、おがみ始めた。

「天の神様、どうかお助けください。」

ケムケムのすがたを見た周りの生き物も一緒に手を合わせ、おがみ始めた。

「天の神様、アマミシマの神様、どうか私たちをお助けください。」

神山の生き物たちは、強く強く願った。そして、大津波がいよいよ目の前にせまり、まさに神山をのみこもうとした、そのときだった。ピシャーッ。ドドン。ガラガラガラー。

神山の前に、目がくらむほどの大きな雷が落ちてきた。なんと、その雷は、大津波を真っ二つに引きさいてしまった。引きさかれた大津波は、神山の東と西に分かれ、山のふもとにある寝利屋と金谷の集落をよけるようにして、通り過ぎていった。やがて、二つの白いすじは、しだいに細くなり消えていった。「やったあ。助かったんだ。」

神山の生き物たちは手を取り合い喜び合った。

こうして、神山の住人たちがおがみ、大津波から逃れたこの辺りでは、神山のことをいつしか、おがみ山と言うようになったそう。

